

## ゴードン・マッタ＝クラーク 〈ブロンクス・フロアーズ〉の二つの展示

平野千枝子 (山梨大学)

ゴードン・マッタ＝クラーク (Gordon Matta-Clark 1943-1978) が、建物全体を切断するプロジェクトに先立って行った 1972-3 年の作品群、通称 〈ブロンクス・フロアーズ〉は、ニューヨークの住居の室内で、床や壁の部分を切り取るものだった。一連の試みは、1972 年 10 月に始まった個展の準備の時期に実行された。その後も継続され、1973 年 11 月、ジェノヴァでの個展で他の作品とともに写真が展示された。

1972 年の展示は、ニューヨークのグリーン通りにあったスペース、112 グリーン・ストリートで行われた。大規模な集合住宅建設のために住民が立ち退いたマンハッタンのアパートから切り抜いた断片のほか、床や天井を切り取った後の写真が、コラージュのように組み合わせられて展示された。一方ジェノヴァの画廊では、建物の外観と内部の写真が並べて展示され、室内での行為のドキュメンタリーのような様相を呈した。

この違いは、プロジェクトが実行された場所に近接するスペースで行った提示と、ヨーロッパの観客に対する説明的な展示の差異であると言えるかもしれない。しかしマッタ＝クラークののちの活動を考察すると、ここには、建築に対する作家の相補的な二つの態度が、すでに現れているように見える。

再開発のために住民が立ち去った後の建物を選んだことは、ニューヨークの名だたる近代建築への注目とは全く異なる視点であり、既存の建物にそれまでになかった穴をあけたことは、建築空間による生活の抑圧への批判として捉えられる。マッタ＝クラークの背景には左翼的な人間中心主義の伝統があり、その作品はしばしば、アンリ・ルフェーブルに代表される空間の政治への批判から解釈されてきた。しかし、彼の活動にはそれだけでは説明できない側面がある。1970 年代は、情報工学が展開し、環境意識が高まりをみせ、世界が人間だけでなく様々な要因との関係を介して組み替られていく可能性が、注視された時代だった。美術作品においては「プロセス・アート」や、ロバート・スミッソンによるエントロピーへの着目があり、マッタ＝クラークも 1970 年前後に、カビによって変化していく作品を試みた。

マッタ＝クラークがその活動を通じて、都市の変化が含んでいる政治性を指摘したことは重要である。都市の状況を示すジェノヴァのドキュメンタリー的な展示には、そうした意図が含まれていただろう。しかし、空間への政治と資本による関与を重視する見方が全体的な決定論となれば、モダニズムの一部ともいえる。ニューヨークの展示の、写真を不整合に組み合わせた空間の裂け目を、これを乗り越えるものとして見ることができる。人間の所有を離れた時空間の強調は、管理された「空間」の間隙を示唆するものではないだろうか。彼の錬金術への言及や、のちの建物の切断の複雑なかたちも、こうした関心と結びつけて理解できる。